京都大学医療技術短期大学部紀要別冊
健康人間学　第11号　1999

鏡が映すもの

加茂映子

What Does the Mirror Reflect?

Eiko KAMO

Abstract: There is no world without mirrors. The oldest mirror is supposed to be the one excavated in an old city in Mesopotamia, dated from B.C. 2500 to 2000. Since then, the mirror has served as a tool to reflect our faces, as a decoration and as a precious thing, magical or sacred. Modern science would have been impossible without mirrors.

Apart from man-made mirrors, nature has provided us with water-mirrors, showing another image of ourselves, teaching us what we are.

In this report, three scenes regarding water-mirrors are discussed.

1. Narcissus peering into his own reflection.
2. Eve, just after being created by God and awakened, looking at her image in the water.
3. The monster in the novel *Frankenstein* whose first view of his own face shocked and brought him to despair and hatred toward mankind.

Although the ways the mirror reflects us are many and varied, it surely reveals to us what we are and what is hidden within us.

Key words: Mirror, Self-image, Self-recognition

個人には侵すことのできない権利があるという自覚がたかまってきたのはルネサンス以降のこととされている。近代化の尺度とされるこの個人意識の問題は，人と人と，また，人と社会との関係に大きく関わりながら，現代に至っている。

しかし，人間はどのようにして，また，いつ頃から，自己を意識するようになったのであろうか。自己についての意識は，ルネサンスよりもはるかに以前から在ったと思われる。それはずっと早い時期に，人が，考え，感じる存在としてこの世に出現したときに，それがダーウインの進化論で裏づけられるとしても，あるいは聖書にあるように，自らに似るように，自らのかたちに，神が人を創られたとしても，人の心の中にあったと考えられないであろうか。そのとき，人は独りではなかった。彼は自分と同じような姿のものを目にしたでもあろう。

この私はなにものなのか，この肉体，外界との隔てとなるこの皮膚におおわれたこの肉体が，私というものなのか。目にする木々や流れる雲は私ではない。でも私はそれを自分の目から自分の内部へ取り込んでいる。頬に感じる風の爽やかさ，聞こえる鳥の歌声，岩の手ざわり，そんなものはみな，私の中に入っていく。あそこに人影が見える。私も多分あのような姿をしているのだろう。けれども私は自分の姿を，前からも後ろからも見たことはない。だ

京都大学医療技術短期大学部一般教育
Division of the General Education, College of Medical Technology, Kyoto University
1998年11月30日受付

が，こんなことを考えているのは他ならぬこの私だ。

あそこにいる四つ足の獣もこんなことを考えるているのだろうか。そんなことはなかろう。考える主体である私という人間は，今，自分を一対象として客観的に捉えようとしている。

こんなふうに，その人間は思ったかもしれない。

アテネの哲学者ソクラテス（469？～399 B.C.）は町へ出て多くの人に会い，話をした。

ソクラテスは，彼らはそれぞれの分野では賢いが人間として一番大切なことを知っていない，しかも，知らないのに自分では知っているつもりになっている，ということに気付いた。そこでソクラテスは，自分もなにも知っていない，が知らないことに気付いている，と言った。これが彼の「無知の自覚」である。

このソクラテスの思想は，デルフォイの神託が下したお告げ「汝自身を知れ」に起因するとされている。自己への意識の起源は有史以前にさかのぼるのかもしれない。

さて，太古，写真はもちろん，人工の鏡のなかった頃，自分の外観を知るには視覚による以外，方法はなかったであろう。首を曲げたりひねったり，目の届くかぎり自分の姿を見て取ろうとする。だが，目が嵌め込まれている頭部を精一杯動かして見て取れるだけしか見えず，目の据えられたところは見えず，背部も見えない。というのも，見るためには対象から距離を置かなくてはならないからである。

人がはじめて自分の姿を見たのは，静止した水の面に映った自分の影に，たまたま目を留めたときであったろう。

金属鏡が造られた歴史は古い。その最古のものは紀元前2500～2000年頃に栄えたメソポタミアの古代王国の首都スーサから発掘された柄つきの円鏡とされており，以後，鏡は顔や姿を映す道具として，また装飾品として，あるいは呪力を備えた神器として，人間にとって欠くべからざるものとなるのである。

だが，話を自然の鏡に戻そう。おだやかな陽光が射し込み，風のそよぎが水面を波立たせることもない林間の小さな池の水鏡に思いを向けよう。

1．ナルキッソスの鏡

ギリシャ・ローマ神話の一つにナルキッソスという名の美青年の物語がある。オヴィデウスによれば河の神ケピソスを父とし，水の妖精イリオペが母となって生まれた，この可愛らしい男の子は，はや16歳を迎えている。少年と若者とのあわいのような華奢なからだつきの彼に，多くの娘が，また若者が，言い寄った。が，ナルキッソスは思い上がっている。言い寄る若い男女の切ない気持ちを推し量るどころか，鼻であしらうのだ。

彼が山で狩りをして歩いていたとき，エコーという妖精が彼に目を止めた。あの山から山へこだまする，響きわたる声を持っている妖精エコーである。今日，こだまといえば声だけの存在であるが，当時はまだからだもあったのだ。そのエコーが恋して言い寄ったときにも，ナルキッソスは彼女の求めを冷淡に退けた。悲しみと絶望のあまり，エコーは奥深い森の洞窟に入ってしまった。やつれはてて，声と骨だけを残すのみ，いや，骨も石に変わってしまい，今では声だけが生き残っているのである。

彼に愚弄された若者は他にも大勢いた。その一人がナルキッソスにも人を恋するという想いが起きますように，そしてその恋の報いられることがけっしてありませんように，と天に祈った。この祈りを復讐の女神が聴き届けたことがナルキッソスを悲劇に追いやった。

狩りに疲れた少年は木立と青草に囲まれた泉へやってきた。渇きを鎮めようと澄み切った水のほうへ屈み込むと自分の姿が水に映った。少年は魅了された。その面影の，輝く眼や美しい巻き毛や健康そのものの顔や，その他，水鏡に映じるすべてに感嘆し，恋い焦がれるのだ。

その場を離れることができない彼は，恋しい若者に話しかける「おまえに腕を差し伸べるとそちらからも腕を伸ばしてくる。笑えば笑いが

返ってくる……。美しい口元の動きから察するかぎり，言葉を返してくれてもいる。ただ，それがこちらの耳に届かないだけだ！わかった！それは私だったのだ」と。

このように，ナルキッソスは恋の対象と自分とが同一であると知る。彼は求める存在であると同時に求められる存在でもあるのだ。「私が望んでいるものは私の中にある……。ああ，この私のからだから抜け出せたなら！愛する者としては奇妙な願いだが，私の愛するものが私から離れていたら！」とナルキッソスは嘆き悲しむ。

ソクラテスの場合と異なり，ナルキッソスにとって自らを知ることは，自分が愛の主体であると同時にその客体であると知ることであった。それを知らせたのは森の奥の鏡のように澄み切った池の面，風に吹かれて落ちた小枝がさざ波を立てることもない水鏡であった。

寝食を忘れ，我と我が影を見つめ続ける彼は瘦せ衰えて，ついに果ててしまう。一説には，水に映った自分の姿を抱擁しようとして溺れ死んだということである。また，彼が居た跡には水仙（Narcissus）が水辺にこうべを垂れて咲いたという。よく知られていることだが，自己陶酔症（Narcissism）は彼の名に由来する。

この悲劇的な物語には前置きがある。ナルキッソスが生まれたとき，母イリオペに，この子が老年まで生き長らえることができるかどうかと尋ねられた盲目の見者テイレシアスは，答えて「うん，自らを知らないでいればな」と言った。ナルキッソスの狂乱とその果ての死はこの予言を実証したということである。

2．イヴの鏡

『創世記』によれば，エホバ神は人類の祖アダムを神の似姿の形に創造した。そしてアダムより取ったあばら骨をもってイヴを造り，これをアダムの所に連れてきたのであった。

ジョン・ミルトン John Milton（1608～1674）の最大の傑作『失楽園』*Paradise Lost*（1667）はアダムとイヴの堕落をその中心主題としている，12巻からなる叙事詩である。

第4巻において，アダムは今，自分が楽園でイヴとともに自由を享受し，悦楽を味わい，溢れるばかりの豊かな恵みを受けていることで神に感謝している。アダムは言う，イヴ，おまえと一緒に居れば，骨の折れる仕事もどれほど楽しいことか，と……。イヴは答えた，あなたなくしては私の生きる意味はないのです，と。そしてアダムを「私の導き手」「私のかしら」と呼んでいる。

続けてイヴは自分がこの世にやってきたときのことを回想して語る。イヴの目覚めの場面が彼女自身の口から述べられるのである。

> 私は今でもしばしばあの日のことを思い出します。眠りから初めて覚めてみると，木陰の花床の上に私は身を横たえていました。自分がどこにいるのか，自分が何者なのか，どこからどうやってそこに連れてこられたのか，不思議に思いました。そこから余り遠くない所に，囁くような小川の細流が或る洞窟から流れ出て，ひろやかな湖に注いでいました。水はそこでは静かによどみ，広い青空のように澄み切っていました。

イヴは，ナルキッソスのように森の中を歩いていて，たまたま水辺に来たのではない。目覚めるとそこに居たのである。イヴは続ける。

> なにしろ前に経験したこともない初めてのことなので，訝しく思い，そこへ近づいて緑の岸辺に横たわり，それこそもう一つの青空といえそうな澄み切った，波一つないその湖を覗き込みました。中をよく見ようとして身を屈めると，その真向いの輝く水面の奥に或る人影が現れ，私を見上げようと身を屈めていました。私は驚いて後ろへ退りました。その人影も驚いて後ろへ退りました。なんだか嬉しくなり，また元の所へ戻りますと，相手もさも嬉しげにさっと戻り，その顔は私に応えるように同情と

愛の気持ちを漂わせていました。

イヴは水鏡に映じる自分の姿を初めて見た。このことはナルキッソスにも共通する。水に映ったものに引き付けられて，それと想いを通わせたと思っていることにも共通するものがある。続けてイヴは次のように言っている。

もしもその時，或る声に咎められなかったら，私はその場所で今にいたるまで目をこらして相手を見つづけ，虚しい欲望に身を焦がしていたかもしれません。

この言葉からもナルキッソスと同じ心情がイヴにも働いていたことがうかがえるのである。だが，その「或る声」はイヴが水鏡に見たものが何であるかを教えた。その声は言う「おまえが見ているのは，おまえがその湖面で見ているのは，おまえ自身なのだ。その姿は，おまえとともに来たし，また去ってゆく」と。

ナルキッソスは，水の中の恋の対象と自分自身との同一性を知って，主体と客体を自分の中で一体化しょうとするあまり，狂乱に陥った。イヴが「或る声」に耳を傾けなかったならば，ナルキッソスのようになったであろうか。それはわからない。そして，イヴは「或る声」によって「おまえが見ているのはおまえ自身だ」と教えられる。さらにイヴは別の実体のあるものの存在をも教えられるのである。「或る声」は続けて言う「私について来るがよい。おまえの来るのを，おまえの柔らかい抱擁を待っている，影ならざる人間の所へ連れていってやる。おまえはその者の像なのだ。おまえは，断ちがたい絆によって結ばれ，その者を抱き，おまえに似た多くの者を生むのだ。そして，そのゆえに，人類の母と呼ばれることになるはずだ」と説くのである。ここでも依然として声の主の姿は見えない。

「見ることは信ずること」とはいうものの，見えないほうがより信をおきやすいのではないだろうか。

イヴはすぐにその「声」に従い，導かれてアダムの許に到る。その箇所を次に挙げよう。

やがて，私は篠懸の木の下に立っているいかにも美しく背の高いあなたの姿を見付けました。しかし，その姿は，あの静かな水面に浮かんだ像に比べれば，美しさも柔和さも，また淑やかさもずっと劣っているように思われました。私は向きを変えて逃げました。

イヴの心情にはエコーをはじめ，多くの娘たちに言い寄られたのを拒んだナルキッソスに似たものがある。だが，ナルキッソスと異なり，ひとたび外界の「或る声」に心動かされたイヴは，湖面の自分から身を離し，遠ざかる。たとえそれが人間を超えたものの声であったにせよ，イヴには自己の外なる世界に関心を抱く余裕があった。それゆえ，ナルキッソスのように自己完結の世界で狂乱に果てることを免れたのである。

その上，この直後に自分以外のものを目にして，一旦は逃げようとするけれども，追いかけてくるそのものの叫びを耳にすることになるのである。

引き返してくれ，美しいイヴ！おまえは誰から逃げているのか知っているのか。今，自分が避けて逃げているその者から生まれ，その肉であり，その骨であることを知らないのか。私はおまえをこの世に送り出すために，自分の心臓に近い脇腹から躍動する生命をおまえに与えたのだ。愛すべき慰めとして，離れることなく末長く私のそばにいて欲しかったからだ。私はわが魂の一部としておまえを求め，わが他の半身としてのおまえを求めているのだ。

そのときイヴは「男らしい優雅さと知恵が美しさにまさり，知恵こそが真実うつくしいただ一つのものである」ことを知ったのであった。後に，イヴが知恵の木の実を食べることになる，そのことを，ここで作者ミルトンは暗示しているのである。

イヴは，自分の出生の真相とその意味についてアダムから理を尽くした説明を受け，伴侶として強く求められた結果，自己を知るにいたったのである。人類の母とされるイヴの出生の経緯が，あまりにも従属的であることについては今は触れない。水鏡以外の世界が彼女にあったことはまことに幸いであったといえよう。

3．怪物を映す鏡

『フランケンシュタイン』*Frankenstein*（1818）はゴシック・ロマンスの筆頭に挙げられる作品である。作品の中の「怪物」を造った科学者の名が怪物の名としばしば混同されていることから分かるように，また，『フランケンシュタイン』に関連して多くの映画が造られてきたことから察することができるように，世に知れ渡った小説であるが，作者はメアリー・ウルストンクラフト・シェリー Mary Wollstonecraft Shelley（1797～1851），この作品のペンを執ったのは1816年，18歳のときであった。メアリーの父は，極端な自由主義者で，無神論を唱えたウイリアム・ゴドウイン，母メアリー・ウルストンクラフトは女権拡張運動の先駆者であり，『女性の権利の擁護』*A Vindication of the Rights of Woman*（1792）の著者である。この母はメアリーを産んだ後，産後の肥立ち悪く，十日後にこの世を去った。

小説の題名ともなっている主人公のフランケンシュタインは，科学研究への野心に燃える若い学者である。自然界の神秘に挑戦して生命のない物質から人間を造り出すことを企て，苦心の末に成功する。

造り出されたこの生きものは人間らしい心を備えているが，姿が醜いために，「怪物」と呼ばれ，世に容れられず，孤独に悩む。彼は造り主のフランケンシュタインからも憎まれ恐れられて，良心を持ちながらも復讐の気持ちを募らせ，犯罪を重ねてゆく。

「怪物」のみならず，生みの親であるフランケンシュタインもまた，自身が造ったものによって苦しめられ，自滅させられるという皮肉な運命を背負うことになる。

「怪物」が水に映った自分の姿を目にする箇所までのストーリーを要約してみよう。

彼を見た人々は悲鳴を挙げて逃げ去るか，そうでなければ棒で打ちかかり，あるいは石を投げた。彼は逃げ，質素だが小ぎれいな農家に接した，からだ一つ入れるのがやっとの小屋に身を隠した。この農家に住んでいる隣人の一家はこれまで彼に冷酷非情な仕打ちをしてきた人間とはまったく異なり，慈悲と徳と高い知性を備えた人々と彼には思われた。

彼は板戸のすき間から隣人の日々の暮らしを観察し，その会話を聴き取ることによって，言語を覚え，人間としての資質を養っていく。

しかし，あるとき，「怪物」は水に映る自分を見た。

> 澄み切った水たまりに映った自分の姿を見た時，なんと驚いたことか！最初，おれはたじろいだ。水面に映っているのが本当におれだとは信じられなかった。事実そのとおりの怪物なのだと，はっきり分かったとき，おれはがっかりもし，くやしくもあり，この上なく辛い気持ちでいっぱいになった。

しかし，「怪物」は確信していた，あのようにすばらしい隣人たちであるから，自分を受け入れてくれるであろうと。よい機会に恵まれ，彼らの前に姿を現わし，心中の苦悩と孤独の淋しさを訴えたならば，彼らの好意と愛情を得られる，と「怪物」は信じたのである。

結局，この企ては失敗に終わる。自分を「世間と結びつけていた唯一の環がはじけてしまった」と思う「怪物」の胸を，はじめて復讐と憎しみの感情が満たす。この瞬間から「怪物」は人類に対して，そしてなによりも，彼を造り，「この耐えがたい悲惨な運命へと送り出した男に対し，永遠の宣戦布告を行なって」ひたすら破滅の道を突き進んでゆくのである。

ストーリーが水鏡の箇所から大分先へ行ってしまった。話を戻そう。

水鏡を見たことが致命的であったとはいえ，人々が彼に示した恐怖や嫌悪の態度から，また，自ら察知した自分の物腰の無骨さや発声のたどたどしさから，「怪物」はすでに，自分が他の人間と違っていることに気づいていた。

彼が自暴自棄に走った原因は，自分と他の人間とを結びつける「環」がはじけたことにある。造り主であるフランケンシュタインにさえ嫌われ，アダムのように伴侶を得ることさえも拒まれた。それほどに彼は人間らしさを剥奪されていた。いや，もともと与えられなかったのであった。

三つの物語の中の「水鏡」の場面を取り上げて，自己への意識について考えてみた。これらの話において，自己と自己の像との関係や自己と他者との関係はそれぞれ異なっている。一方，共通点は，三人の人物が自然の中で暮らしていることである。

ギリシャ・ローマ神話の中の物語には屋内の場面もなくはない。たとえば，ピュラモスとテイスベを隔てる両家の間の壁，真鍮の塔に監禁されるダナエ，プロクネとテレウスの不吉な寝所とピロメラが凌辱される羊小屋など。しかし，ストーリーの進展のためにそのような場面が選ばれたのであり，作者の関心は室内そのものにあるのではない。神話の世界には森，山，川などの場面が多い。神話の世界は大自然の中にある。

『失楽園』は17世紀中葉に書かれた。だが，アダムとイヴは神の意図によって造られ，楽園で暮らしているのであるから，彼らが大自然に包まれているのはきわめて当然なことといえよう。

19世紀初頭の作である『フランケンシュタイン』において，「怪物」はオーストリアの都市，インゴルシュタットの大学の，若い学徒の実験室で，生命の通わぬ物質から造り出された。しかし，彼はその時代の社会に容れられず，人目を避けて，原始人のように生きてゆく他はなかった。自然は彼に対して苛酷に振る舞いはしたが，彼の方では自然に対してなにか神々しさや美しさ，そしてなによりも歓びを感じることがしばしばあった。彼は造り出されるやいなや，森へと逃れざるを得なかったのだ。近代人になり損ねた彼は，厳しい冬を切り抜けた後の感慨を次のように語っている。

> 春はどんどんたけていった。天気はよくなり，空には雲一つなかった。驚いたことに，以前荒れ果てて陰気だったものが，今ではもっとも美しい花と緑に燃え立つのだ。おれの五感は，千もの喜ばしい香り，千もの美しい眺めに，満足し，元気づいた。

作者メアリー・シェリーは人間界に容れられないこの「怪物」にも，せめて，自然のふところという神の恵みを，公平に与えたかったのかもしれない。

三つの物語を自分の「鏡」として，今一度自己を見つめ直してみたいと思う。

参　考　文　献

1）オヴィデウス：『変身物語　上・下』（中村善也　訳）．岩波文庫，1981
2）ミルトン：『失楽園　上・下』（平井正穂　訳）．岩波文庫，1981
3）M.W. シェリー：『フランケンシュタイン』（臼井　昭　訳）．国書刊行会，1978